



万葉からみる湖北

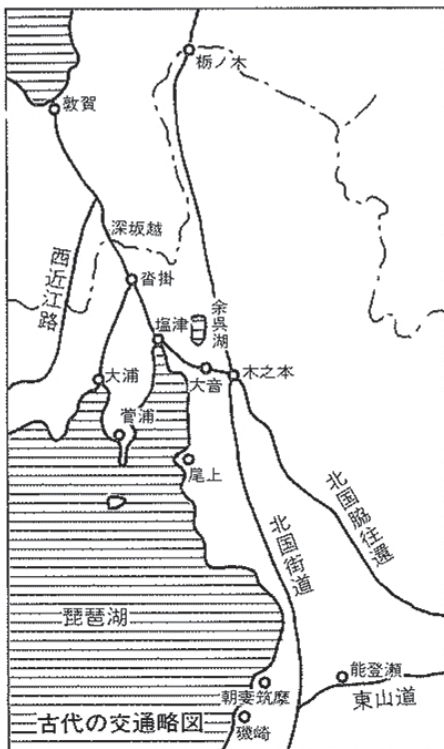
湖北路

北国街道、北国脇往還、塩津街道など湖北を南北に縦断するこれらの道は、いずれも北国(北陸)と近江をつなぐ主要な道として、早くからよく利用されてきました。

北国街道は、現在の彦根市下矢倉で中仙道と分かれて北上し、木之本を経て栃ノ木峠を越えて越前(福井県)の今庄に出る道をいいます。

北国脇往還は、東海地方から近江を通り北陸へ抜ける最短路で、中仙道の関ヶ原(岐阜県)付近で分かれて近江にはいり、伊吹山、小谷山の西麓を通り木之本で北国街道と合流しています。

塩津街道は、木之本から大音^{おおと}越えて飯の浦に出て、さらに地獄坂を越えて塩津浜を通り、集福寺^{くつがき}～沓掛^{くつがけ}を経て深坂越えて疋田(敦賀市)



に抜ける道をいいます。

また北国へ往く道は、陸路だけではなく湖上交通を利用することも多く、この場合は湖東より湖西まわりによって塩津の港に着き、ここから塩津街道をたど

ったようです。

塩津は海津、大浦とともに湖北三港に数えられた要港で、塩津の名は「延喜式」にも見えます。

菅浦

菅浦は、葛籠尾崎の西側の基部にある小集落で、南は琵琶湖に面し、背後はきり立った山に囲まれて、陸の孤島といわれてきた集落です。「万葉集」のなかに

高島の阿渡の水門を漕ぎ過ぎて塩津菅浦

今か漕ぐらむ

小弁 卷9-1734

と詠んでいます。船旅の行き還りに、菅浦の近くを通り過ぎたり、たまには寄港したこともあったのでしょうか。

菅浦は現在、奥琵琶湖パークウェイが開通して、交通の不便も解消されました。菅浦は古い歴史を秘めた土地で、天平宝字8年(764)に、淳仁天皇が行在されたという伝説があり、氏神須賀神社の裏山に御陵と伝える古墳があります。またこの土地には、鎌倉期から明治初年まで書き継がれた、「菅浦文書」で有名な共有文書が現存しており、中世文化を研究する人にとっては、貴重な資料の一つになっています。

遠津一大浦

大浦湾の最奥部にある大浦の集落は、塩津ほどではありませんが、古くから港町として栄えた所です。

北国へ向かう旅人は、大浦に上陸すると大浦川に沿って北進し、日計山の麓を通過して、沓掛^{くつがけ}の北で塩津街道に出ました。大浦を詠んだ歌に、

霰降り遠つ大浦に寄する波よしも寄すと

も憎からなくに 卷11-2729
山越えて遠津の浜の石つつじわが来るま
でに含みてあり待て 卷7-1188

があります。万葉の昔は、岩つつじによって旅のわびしさを慰められたことであろうが、現在、大浦の湖辺には岩つつじを見かけることはありません。

水陸交通の要衝—塩津

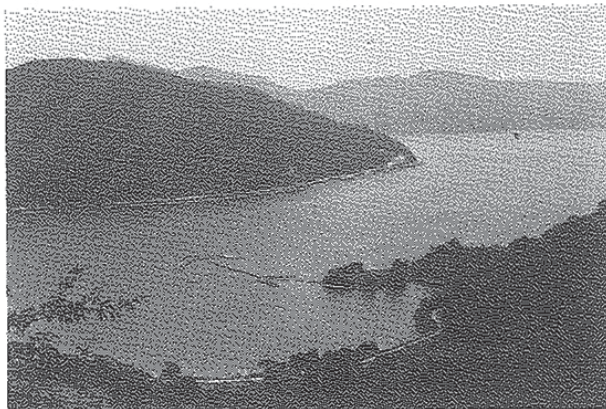
琵琶湖の最北端にある塩津は、敦賀と琵琶湖を結ぶ最短距離にあります。北国への道の玄関にあたり、北陸の塩や海産物などの運送の集散地として栄え、塩津湾を出入りする船で港は賑わっていました。

塩津という地名は、北陸で採れた塩をここから都へ輸送されたところから付けられた名で、人の往来が多かっただけに、かなり歌にも詠まれています。

あちかまの塩津を指して漕ぐ船の名は告
りてしを逢はざらめやも 卷11-2747

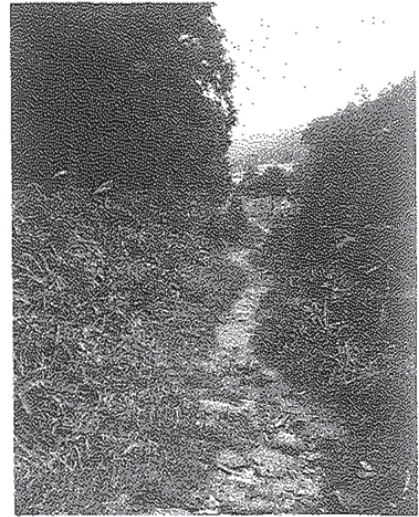
昔の塩津湾は、内陸に向かって深く入り込んで、香取神社のあたりまで湖水がはいり込んでいました。そして北陸からの物資運搬のために、塩津浜から沓掛にかけて堀割がつくられ、川筋には問屋や倉庫、旅宿が立ち並んで活気がありました。しかし、明治になって船運に代わって陸上交通が発達すると、塩津の港はしだいにすたれていきました。旧塩津街道は、現在国道8号線となって敦賀に通じています。

塩津山



月出より塩津湾を望む

塩津山という名は現在残っていませんが、塩津街道を深坂越えて敦賀に出るいわゆる深坂越え(野坂山地)の山をいいます。「笠朝臣金村、塩津山にして作る歌二



深坂峠付近

首」と題詞のある歌に、

大夫の弓上振り起せ射つる矢を後見む人

は語り継ぐがね 卷3-364

塩津山うち越え行けば我が乗れる馬そ爪

づく家恋ふらしも 卷3-365

上の歌は、いずれも塩津山(深坂山)で詠んだものです。深坂の峠を越えると、近江とも別れて越前にはいる、視界は一変していわゆるしなざかる越路の感を深くします。旅人は、この峠道で旅中の安全と武運を祈願して北国へ向かったものです。

塩津街道はその名のように「塩の道」でもありました。古くから北陸沿岸で採れた塩を大和や京都へ運んでゆく要路であり、塩津はその集荷地でありました。昔は、塩俵を背負ったいわゆる歩荷によって峠の難所を越え、塩津浜に運ばれ、ここから船で大津へ運漕されました。峠の登り口の山沿いには、今も塩蔵や問屋跡の石積みが残っており、昔の繁栄ぶりが偲ばれます。また深坂峠には「塩かけ地蔵」が祀られています。地蔵さんの全身に塩がふりかけられているのは、道中の安全を祈願して塩をかけたのが、始まりとなったのでしょうか。

伊香山

草枕旅行く人も行き触らばにほひぬべく

も咲ける萩かも 卷8-1532

伊香山野辺に咲きたる萩見れば君が家な

る尾花し思ほゆ

卷8-1533

この歌もさきの歌と同様、笠金村が伊香山で詠んだと題詞にあります。

伊香山という名は、伊香郡には見当りませんが、木之本の大音にある伊香具神社（式内社）の裏山が最も有力視されており、万葉学者の犬養孝氏も「伊香山は賤ヶ岳の南嶺」といわれています。

古くから湖東から北国へ出る道として、大音—（大音坂越え）—飯の浦—塩津街道を北へ向かう道と、一つは木之本—栃ノ木峠—今庄へ出る道とがありました。

この歌は、たぶん作者が大音坂の道を通り過ぎた時に、詠んだものでしょう。大音の里



伊香山—前方の森は伊香具神社

は、隣の西山の集落とともに昔から琴糸、三味線の糸の生産で有名な所です。

津乎の崎—津の里付近

余呉湖（伊香の小江）を水源とする余呉川は、南流して山本山（湖北町）の麓を流れ、尾上の集落で琵琶湖に注いでいます。この付近を詠んだ歌に、

葦べには鶴が音鳴きて湖風寒く吹くらむ

津乎の崎はも

卷3-352

津乎の崎の所在については諸説がありますが、今日では近江説が定説となっています。

「代匠記」にも「近江国浅井郡都乎郷あり、湖風をみなと風とよめるはこの所にや……」とあります。すなわち現在の津の里の付近を指しています。

現在ある野田沼は、万葉時代には入江になっていて船どまりには格好のところだったと



津乎の崎—尾上港

考えられます。尾上のあたりの湖辺は、葦が生い茂り、冬期には白鳥や雁、鴨などの渡り鳥の飛来地として知られ、万葉の風土の面影の偲ばれる静かなところです。

能登瀬・息長川

坂田郡近江町能登瀬の集落を流れる川を能登瀬川といいます。この付近を詠んだ歌に、

さざれ波磯越道なる能登瀬河音のさやけ

さ激つ瀬ごとに

卷3-314

高瀬にある能登瀬の川の後も逢はむ妹に

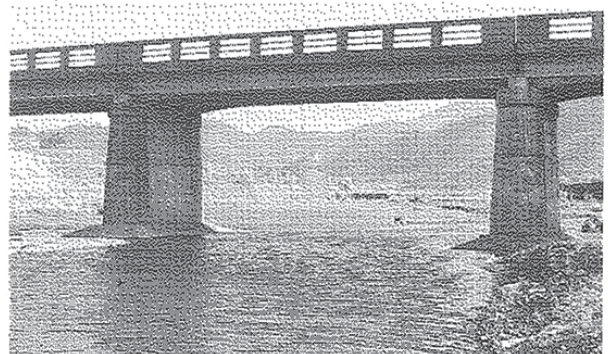
はわれは今にあらずとも 卷12-3018

鳩鳥の息長川は絶えぬとも君に語らむ

言尽きめやも

卷20-4458

能登瀬川はまた名を息長川、天野川、朝妻川、箕浦川などと呼んでいます。能登瀬は息長氏の根拠地で、湖北一円に勢力をもち中央政権にも深いつながりをもっていた豪族です。多くの媛が中央に嫁いでいます。息長氏の祖をまつる山津照神社（式内社）があり、同社の境内に息長宿弥王の墓と伝えられる古墳があります。その出土品は渡来系文化の影響を受けたものだといわれています。



能登瀬川—息長橋

託馬(筑摩)・狭野方・遠智

託馬野に生ふる紫葺衣に染めいまだ着ず
 して色に出でにけり 笠女郎 卷3-395
 狭野方は実にならずとも花のみに咲きて
 見えこそ恋の慰に 卷10-1928
 狭野方は実になりにしを今さらに春雨
 降りて花咲かめやも 卷10-1929
 真珠つく越の菅原われ刈らず人の刈らま
 く惜しき菅原 卷7-1341
 階立つ 筑摩左野方 息長の 遠智の小菅
 編まなくに い刈り持ち来 敷かなくに
 い刈り持ち来て 置きて われは徳はす
 息長の 遠智の小菅

卷13-3323

託馬は筑摩のことで、米原町の湖岸の天野川の河口にある朝妻筑摩を指しています。この付近は中仙道と北国街道の分岐する箕浦の集落に近く、水陸交通の重要な所でありました。朝妻は古くから要港として栄え、街道を往き来する人や船の出入の多かった所です。



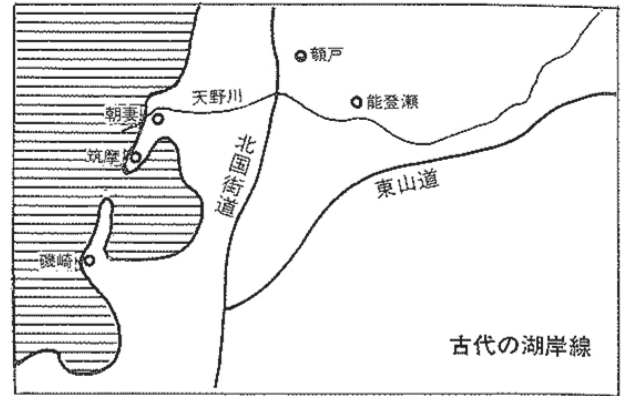
朝妻の旧港付近

河口付近の朝妻港旧跡には「朝妻港跡」の碑があります。また筑摩は古く御厨が置かれていた所で、同集落の筑摩神社の鍋冠祭は奇祭として有名です。

また歌に詠まれた筑摩左野方、息長の遠智はいずれも地名を指しているようですが、現在その名はこの付近には残っていません。

朝妻山ー顔戸

今朝行きて明日は来なむと言ひし子が
 朝妻山に霞たなびく 卷10-1817



子らが名に懸けの宣しき朝妻の片山岸に
 霞たなびく 卷10-1818

朝妻山の所在については、通説として奈良県御所市朝妻の地の山を指していますが、近江町顔戸の地にも、朝妻山(顔戸山)と呼ぶ山があります。この付近は東山道と北国街道が分岐する地点にあり、しかも朝妻港にも近く、早くから旅人に知られていた山であったと考えられるので、定説をまげて朝妻山を近江にしました。

磯の崎



磯崎

磯の崎漕ぎ廻み行けば近江の海八十の湊
 に鶺鴒多に鳴く 卷3-273

磯崎は普通名詞ではなく、米原町磯の地の湖岸をさしており、磯崎と呼んでいます。

また八十の湊というのは、特定の湊をさしているのではなく、芹川、犬上川、宇曾川、愛知川など琵琶湖に注ぐ河口を八十の湊と詠んだものと考えられます。

移りゆく湖辺の光景を眺めながら漕いで行く船人の姿が、ほうふつと浮かんでくる歌です。
 (藤井五郎氏提供)